3.5　四季の比較

コア期間における各季節のPM2.5平均濃度の階級分布を表3-5-1に示す。全体的な傾向は、平均濃度が環境基準の長期基準と同等の15g/m3を超えたのべ地点数は100地点中6地点であり、年間を通じて低い水準で推移した。

PM2.5平均濃度の全地点平均値（25地点の平均値）、最大値及び最小値を表3-5-2に示す。全地点平均値は高い順に、秋季（11.3g/m3）、冬季（10.7g/m3）、春季（9.8g/m3）、夏季（8.2g/m3）であった。平均濃度の最大値は冬季の富津で21.5g/m3であった。

主要成分組成については、PM2.5平均濃度が比較的高かった秋季は全体的にOCの割合が高く、全地点平均で29%であった。秋季のOCに次いで多い成分は、18地点でSO42-、5地点でNO3-、2地点でECであった。冬季は秋季と同様、OCの割合が最も高く、NO3-、SO42-、NH4+のイオン比率が拮抗する傾向であった。春季は全体的にSO42-とOCの割合が高く、次いでおおまかにNH4+、EC、NO3-の順となった。夏季は、SO42-とOCのどちらかまたは両方の割合が高く、春季と比較して主要成分組成の構成比に大きな違いはなかった。

表3-5-1　各季節のPM2.5平均濃度の階級分布



表3-5-2　各季節のPM2.5平均濃度の全地点平均値、最大値、最小値

　　　

＊以下、水溶性イオン、炭素成分、無機元素成分について個別に記述予定